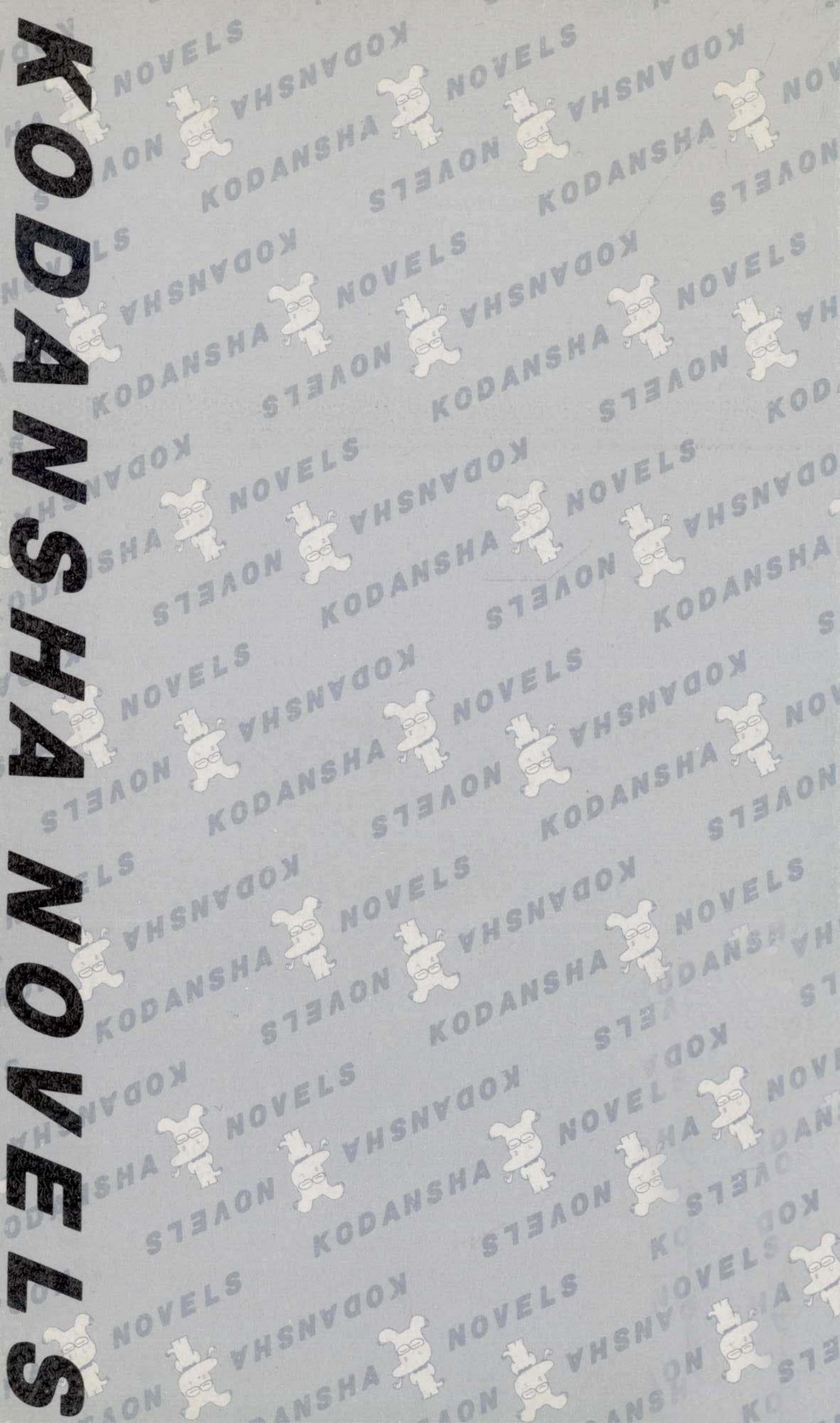


KODANSHA NOVELS



2月30日の恋人たち

昭和五七年一〇月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価五八〇円

著者—小林久三 ©1982 KYUZO KOBAYASI Printed in Japan

発行者—三木章



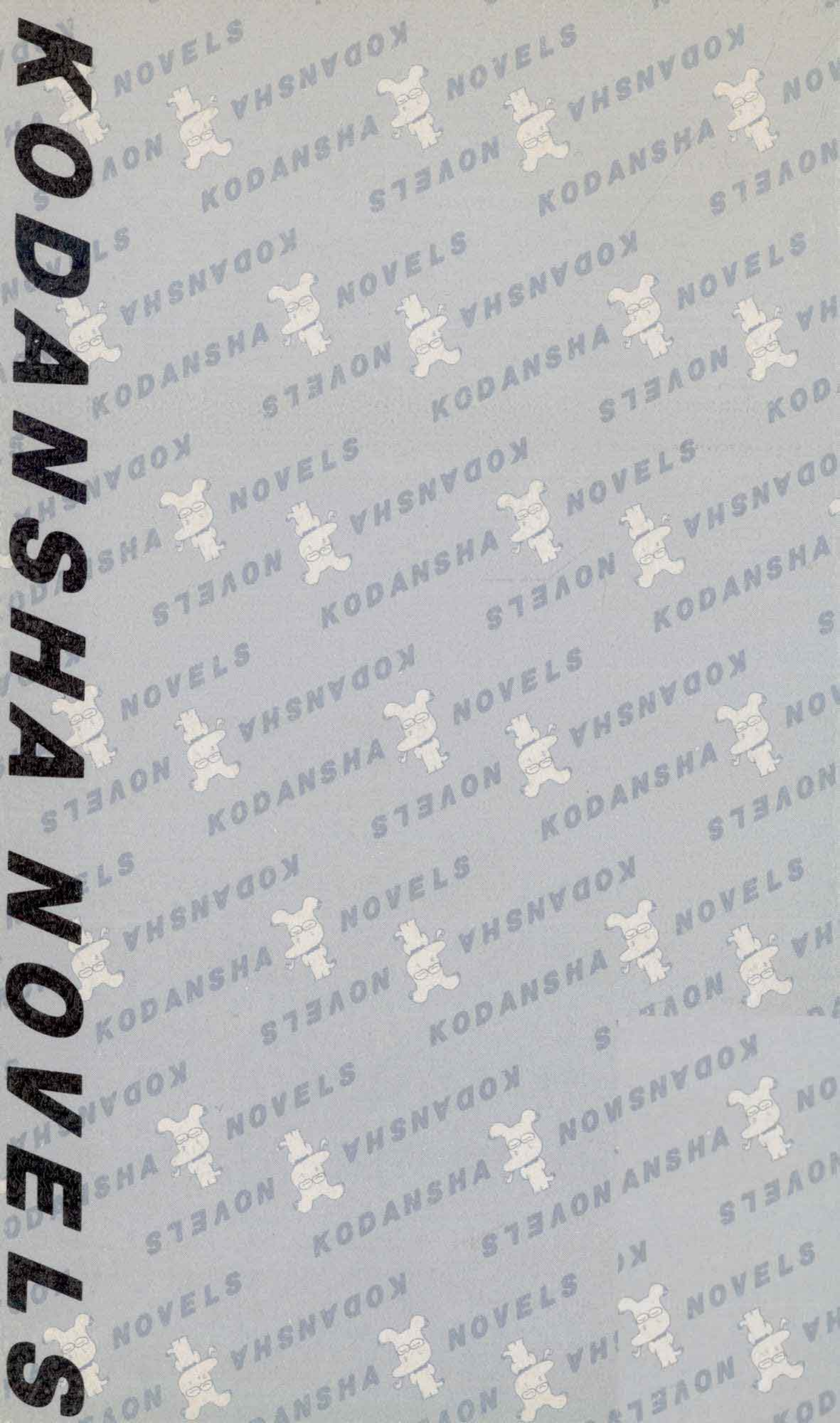
発行所—株式会社講談社

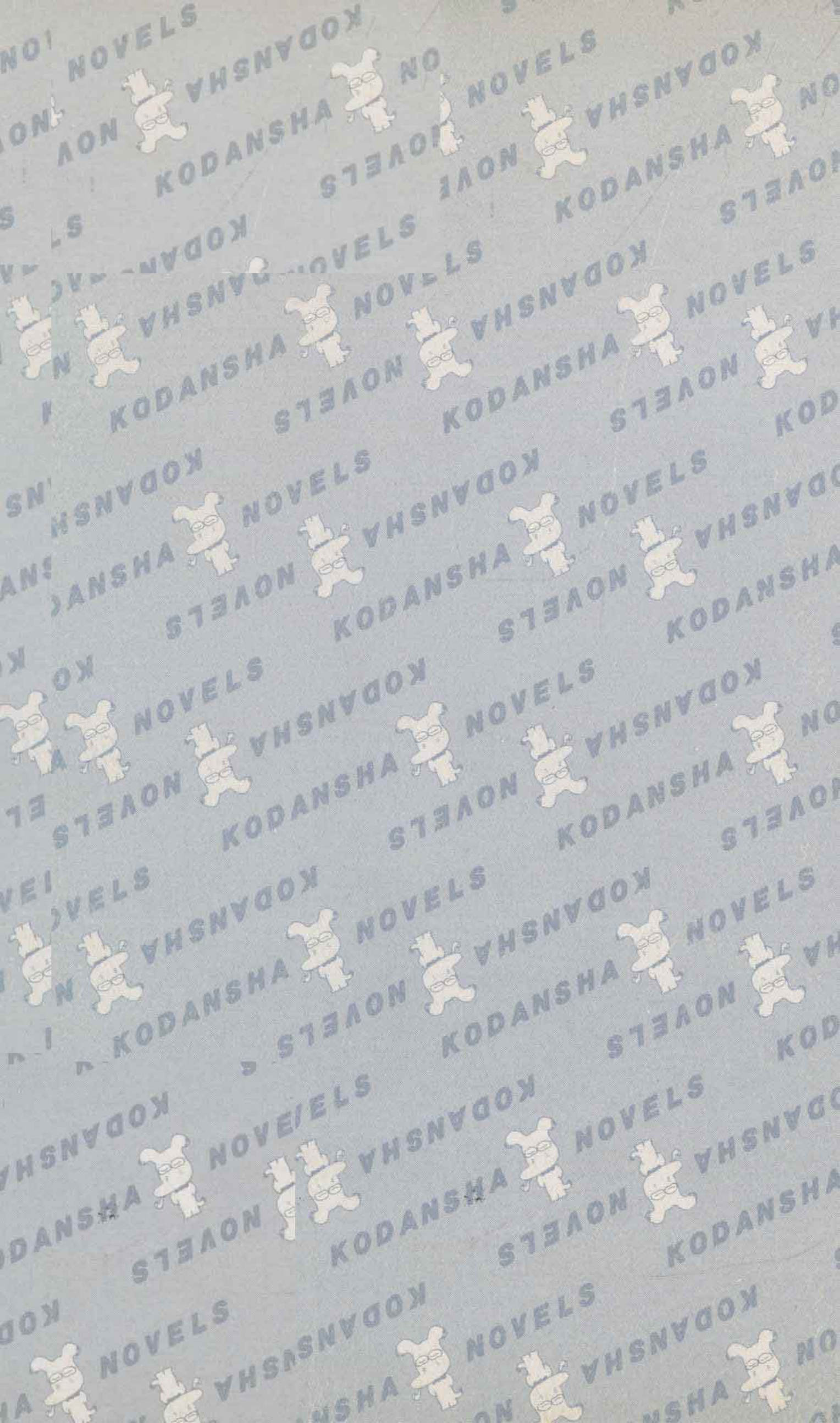
東京都文京区音羽二—二二—二二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一二 (大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—凸版印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

KODANSHA NOVELS





2月30日の恋人たち

林久三

ODANSHA 講談社 ノベルス NOVELS

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 細川武志
本文イラストレーション 細川武志

1

なにげなくテレビに視線を投げたとき、杏子きようこの目は一点に凝結した。ブラウン管には、中年の男の顔写真が大写しにされている。

顔写真の下には、テロップの文字が白く流れている。

「焼身自殺した松井義明さん」

その文字をみつめたとき、杏子は、あやうく、あつと叫び声をあげそうになった。全身がかすかに震え、手にしたコーヒささなみーが小波がたったようにこきざみに揺れた。

「まさか！」

ブラウン管いっぱいに映し出された顔写真を眺めながら、杏子は頭のなかで叫んだ。

「松井さんが自殺するわけがないじゃないの」

ひと違いだと、杏子は必死にいいきかせた。だが、顔写真の中年の男には見覚えがあった。のみで荒くけずったような顔立ち。広い額。翼よくの張ったたくましい鼻。意志的に結ばれた唇。

ひと違いではありえなかった。

ブラウン管の顔写真が消えると、次に黒焦げになった車が映し出された。

画面にアナウンサーの声がかぶるように流れた。

「……焼死体が見つかったのは、昨夜の午後十時十五分頃、仙台市小松島の道ばたに黒焦げになった車があるのを通行人がみつけ、仙台中央署に届け出ました。仙台中央署が調べたところ、車内から炭化状態になっている男

性の死体がみつかりましたが、車のナンバーから死体の身許は、横浜市緑区美しが丘に住む会社社長、松井義明さん、四十二歳とわかりました……」

杏子は感情のたかぶりを押し殺そうとして、コーヒを飲んだ。苦い味が、舌のうえを転がった。香りも味もなかった。なにかどろっとした真黒な液体を飲んだように、飲みこむと胸が黒ぐろと塗りつぶされていくような感じで、できれば、その場で吐き出したかった。

アナウンサーの声はつづいている。

「……松井さんは内側からドアをロックし、運転席でシートベルトを着けて死んでいましたが、仙台中央署では車内にガソリンをまき、火をつけて焼身自殺をしたものという見方を強めています。松井さんの奥さんの早苗さんの話によると、松井さんは渋谷で会社を経営していましたが、最近、経営不振におちいり、悩んでいたといわれ、三日前の十一月五日から自宅にもどらず行方不明に

なっており……」

杏子は、テレビを消した。これ以上、松井の自殺のニュースをみていることに神経的に耐えられなかったのだ。

杏子は、それでも、なにも映し出さないテレビの前に、しばらく立ちつくしていた。頭の奥のはの暗い画面には、松井義明の顔写真がビデオのように映し出されている。彼女はそれをみていた。

やがて、頭の奥の画面から精悍な松井の顔が消えた。かわりに、

〈焼身自殺〉

という文字が、夜空に浮んだ鮮かなネオンのように点滅をくり返しはじめた。

急いで、なにか考える必要があった。

けれど、思考機能が麻痺したようで、なにひとつ考えられない。

窓際に立った。

阿佐ヶ谷に立ったマンション六階にある部屋の窓からは、アーケードの商店街や駅のホームが見降ろせる。付近に密集した民家やアパートの屋根々々に、さわやかな朝の陽光がそそいでいるにもかかわらず、杏子の目には陰鬱な重い空が、屋根と道路のうえに詰まっているようにみえた。

〈松井さんが死んだわ〉

いまテレビのニュースでみた松井義明の自殺が、ようやく実感としてとらえられるようになってきた。自殺や失踪といったニュースは、毎日のように新聞やテレビでみるけれども、遠い世界の出来事のようにおもえてきたその嵐が、自分の身をつつもうとはまるでおもわなかった。暴風に息がつまって倒れそうになる自分を意識したとき、彼女は、松井という四十二歳の男性が、自分の心や胸に、意外な深さで喰いこんでいる事実気づいた。

〈松井さんは、わたしにとってなんだったのだろうか〉と、杏子は自分の胸に問いかけてみた。

〈恋人？〉

それとも、

〈愛人？〉

そのどちらともいえる存在だった——そんな答えが返ってきた。あるいは、もう少し、複雑な存在だったといえるかもしれない、と杏子はおもい直した。

松井義明には妻がいた。早苗といい、彼よりも三つ年下で、どんな服装を好み、食べものがなにが好きなのか、こまかなことまでも知っている。そして彼が、その妻と離婚するつもりのないことも。

彼に妻がいようといまいと、そんなことは、ほとんど気にしなかったとおもう。週に二回ほど、彼に会い、食事とともにし、抱かれることで、充分、満足だった。海の好きな彼は、横浜や鎌倉に車を走らせ、夜の海を眺め

ながら食事をし、船の白い停泊灯のみえるホテルに誘ったが、それだけで自分の心は充たされていた。

それ以上に、なにもとめなかった。がっしりした肩幅の彼を間近に眺め、彼の息遣いを耳もとできくだけで、ひどく安心したような気分になれた。そして、彼のおしゃべりに耳を傾けているとき、快適なジャズをきくような浮き浮きした気分になったとおもう。

へわたしにとって、松井は

と、杏子はぼんやりと考えた。恋人であり、愛人であり、頼れる叔父であり、優しい兄でもあり、なにごとくも包みかくさず話すことのできる友人でもあり、人生の深さを教えてくれる素敵な教師でもあったといえるだろう。

実際に、東和大学文学部に三年間通っているけれど、講義で教えられるよりもはるかに多くのことを、松井義明から学んだとおもう。商事会社「Q & P」社長、松井

義明、四十二歳。

その彼が、突然、仙台で自殺したという。

信じられないわと、杏子は力なく呟いた。どこか信じられない気がした。あまりに不意の出来事なので、実感までの距離に薄い真空があった。

「どうしようか」

と、杏子は声に出して独り言をいった。「仙台へいってみようか」

二、三日、大学のほうはやすんでもいい。無味乾燥な講義をきくよりも、この目で松井が死んだ場所を確かめてみたい。そして、ひとりさみしく死んだ場所に、花をそなえてやりたい。

仙台へいく気になった。

それが若さなのか、一度、おもいつくと、すぐに行動に移しはじめた。

飲みのこしのコーヒーを一気に胃の底に流しこむと、

杏子は着換えをはじめた。

顔を洗い、鏡の前に坐った。

鏡のなかには、背後の壁の時計が映っている。九時二十分だった。

これから飛び出せば、お昼ごろの急行には乗れるだろう。仙台にいくのははじめてだが、急行か特急に乗れば四時間後には、仙台に着くのではないか。

へそれにしても、松井はなぜ自殺したのだろうへ

その疑問が、突然、頭のなかに霧のように湧いてきた。自殺というが、単なる自殺ではない。愛車のなかにガソリンをまき、火をつけるといふ異常な方法で死んだのだ。

へそういえば――へ

と、杏子はおもった。松井と最後に会ったのは、先週の金曜日の夜だったが、そのときの彼は心なしに、いつもの張りがなかったような気がする。表情にも体にも、

ふだんのピアノ線をぴんと通したような張りがなく、どこか鬱屈したような翳があった。

いつものように車で新宿駅まで送ってきてくれ、そこで別れたのだが、別れ際に、

「体の具合でも悪いの？」

と、きいたとき、松井は、

「べつに」

そう軽く答えたきりだった。その声は、ひどく虚ろで、なにか別のことを考えているようにみえたものだ。テレビでは、自殺の理由を、経営不振を苦にして……といていたが、最後に会ったとき、彼の心のなかに死の影が色濃く宿っていたのだろうか。

異常だといえば、最後の晩の松井はたしかに訝しいところがあったなど、杏子はホテルの一室での様子を頭のなかにおもい描いた。

ベッドで、松井は燃えなかった。いつものように杏子

の首筋から乳房、腹から脇腹、腰のくぼみから大腿へと、輪を描くように唇をはわせていった。執拗な唇の動きに、杏子の皮膚がぴくりと引きつり、強力な磁石に引きよせられたように彼の体に自分の体を密着させるような動きになったとき、彼は指先でそっと彼女の下腹部の茂みの合わせ目を押しひろげる。

彼の指先は、やがて杏子のもっとも感じやすい部分を指の腹で静かに圧迫していくのだが、最後の晩は、そこまですでだった。彼女は優しくはげますように、彼の下腹部に顔を埋めたのだが、彼は一向に目覚めようとしなかった。その後、彼女はシャワーを浴び、ホテルを出たのだが、車内には変に白じらしいものが漂っていたとおもう。

松井の下腹部に顔を埋め、彼のものを口に含んだとき自分の姿勢をおもい出し、杏子は顔を赤らめた。

へやはり松井は自殺だったのかしら

鏡のなかの自分の顔に向かって、そう呟いたとき、電話のベルが重苦しく鳴った。

へだれだろう？ こんな時間に

杏子は受話器を取った。

「高見ですけど」

「高見杏子さんですね」

受話器の奥から、男の声が流れてきた。「東和大学文学部英文科の」

「はい」

きき覚えのない男の声に緊張して、杏子は受話器をもちかえた。

そのとき、電話の向こうで男がいった。

「あなたは車の運転ができますね」

「ええ」

「だったら、今日の午後三時に車で仙台に向かってくれませんか」

「車で仙台に？」

意外な言葉に、杏子はかすかに眉根を寄せた。

2

「あなたは、松井義明という男性が、昨夜、仙台で焼身自殺をしたことをご存知ですね」

「ええ……まあ」

うなずいて、杏子は送話口にあたらないように、そつと息を吐き出した。電話の男は、松井とわたしの関係を知っているらしい。二人の仲は、だれにも知られていないはずなのだ。

「松井の死の真相を知りたいとおもいませんか」
と、男がつづけた。

「失礼ですけど、どなたでしょうか」
「知りたいですか」

「はい」

「知ると後悔しますよ」

「後悔？」

「そうです」

しばらく沈黙してから、

「それでも構いませんか」

「構いません」

「そうですか」

男は抑揚のない、低い声でいうと、ややあって、
「やはり、やめておきましょう。それより、今日の午後三時に間違いなく車で仙台に向かってくれますね」

「一応、そのつもりでいますが」

と、杏子は曖昧な口調で答えた。男の電話に、得体のしれぬ不気味さを感じて、はっきりした返事を保留したのだ。

「知りたくないのですか、松井義明の死の真相を」

男は誘いこむようにいった。

「でも、なぜ車で……」

杏子は疑問を口にした。「列車では駄目なのですか」

「当然な疑問ですね」

男はそこで言葉を切ると、

「途中であなたに会ってほしい人間がいるんです」

「わたしに？」

「ええ」

「それだったら、列車でもいいんじゃないかしら」

「そうはいかない！」

男はこれまでのささやくような調子から急に声をあげ、早口でいってから、また声を落した。「あなたに会ってほしい人物は、当分の間、ひとめを避ける必要があるんです」

「ひとめを避ける？」

「そうです。その人物にぜひ、会って欲しい。また、そ

の人物も君に会いたがっています」

杏子は受話器を耳から離し、眉をひそめてそれをみつめ、また耳に押しつけていった。

「だれなんですか、そのひとは？」

「東北縦貫道路を仙台まで走っていただければわかります」

「松井さんに関係ある人物ですか」

「もちろん。走っていただけますか」

「わたしひとりですか」

「できたら……」

「……………」

奇妙な電話だわと、杏子はおもった。

〈これはなにかの罠かもしれない〉

頭の奥深いところで危険予知の赤信号が点滅する一方で、好奇心のようなものが芽ばえはじめた。得体のしれぬ電話の誘いに応じてみるのも面白いのではないか。

その好奇心の底に、松井の突然の死に対する疑念が
蹲うずくまっていることに気づいたとき、杏子は即座に、電話
の誘いに応じてみようかしらという気になった。

「よろしいですね」

「ええ……まあ」

「あなたは車をお持ちですね」

「ええ。車種は……」

「承知しています。スカイライン2000GT。色はシ
ルバー・メタリック。ナンバーは……」

「そこまで知っているんですか」

「女子大生にはふさわしくない車だが、松井さんのおさ
がりでしたね。とにかく午後三時に、阿佐ヶ谷南のあな
たのマンションを出発していただけませんか。走行中
に、連絡します」

「どんなふうによ？」

「走っていただければ……」

そこで、切れた。

沈黙した受話器をしばらくみつめてから、杏子は静か
にフックにもどした。

鏡の前にもどり、改めて自分の顔をみつめた。顔がや
や蒼ざめている。たてつづけに起った予期しない出来事
に、ショックを受けたためだろうか。

化粧をつづけながら、いまの電話は、単なるひやかし
ではあるまいと考えた。ひやかしではないとすると、電
話の主は、松井の自殺の背景にあるものをつかんでいる
らしい。かりに、それがひやかしだったとしても、仙台
にいくつもりであることに変わりはない。

予定どおり、

〈列車でいこうかしら〉

あるいは、

〈指示にしたがって車でいくべきなのか〉

判断に迷った。

いずれにしろ決断するのはわたしなのだと、考えたとき、杏子は車で仙台までいってみようと意を決した。

ひとりでは不安だった。

同行者が必要かもしれないと、考えた。電話の誘いには、なんとなく危険な匂いがする。万一の場合を考える、同行者は男のほうがいいような気がする。いざというときに、男のほうに頼りになる。かといって、妙な男でも困る。長時間、同乗するのに、変に神経を使うような相手では、うっとうしくてかなわない。

杏子は両腕で胸を抱きしめるようにすると、部屋のなかをぐるぐる歩きはじめた。二DKの部屋である。家賃は月五万円。吉祥寺にある大学に通学が便利なのように、両親が借りてくれたのだが、広島で外科医を営む父親のほうに、毎月二十万近く仕送りをしている一人娘が、中年の男と深いつき合いをしていたとは夢にもおもえない。まして、その男が、自殺して、自殺の真相を知

るために、講義をほっぽらかして、のこのこ車で仙台までいくとは考えていないだろう。

広島の両親をおもい出したとき、杏子はふっと、胸の奥に灰色のこわばりを覚えた。

「でも、仕方ないわ」

と、独り言を洩らした。わたしだって、二十一なのだ。魅力的な男性に抱かれたとしても、不都合なことはない。どうせ、大学を卒業したら、広島に帰り、両親のすすめる医者のおと見合いして、結婚するのだろうか。

実際に、魅力的な男性というのは、キャンパスのなかには見当らない。本の虫のような教授や助教授にしても、生活にすっかりくたびれたような顔をしている。知的かもしれないが、男としてぎらつくような魅力に乏しい。

同じ年頃の男子学生に至っては、論外だ。女性にもて

るためには優しなくてはならないと頭から信じこんでいるらしく、例外なく猫ナデ声で話しかけてくるけれども、それは男性としての自分に自信がないことと表裏一体となっていて、五分間も話していると、虫酸^{むしず}が走ってくる。女形志願のできそこないの弟をもったようなもので、まともにつき合う気なんかには、到底、なれない。

「適切な同行者^{パートナー}はいないわ」

舌打ちして、壁のポスターを眺めたとき、杏子は、

「そうだ！」

と、呟いて、指をパチンと鳴らした。

壁には、ハンディタイプのカラーテレビのポスターが貼ってある。カーバッテリーや野外用バッテリーの三電源つきの携帯用の小型テレビのポスターだが、ポスターには、ハワイ生れの相撲取り父子がマンガ風に描かれている。ハワイ生れの相撲取りは、幕内力士きつての巨漢だが、ごつい顔になんともいえない愛嬌がある。巨漢の

わりには、身のこなしがスムーズで、小型テレビを手にしてタップを踊るテレビのC・Fは、爆発的にヒットした。二メートルに近い巨体と小型テレビの対照の妙、巨体が軽妙にタップを踊る意外性が茶の間に受けたのである。

以来、その力士と小型テレビのコンビはつづいているが、壁に貼ったポスターの力士はちょんまげスタイルにランニングで、五歳の長男とジョギングしている姿が、マンガ風のイラストで描かれている。ユーモラスな絵柄のそのポスターが好きで、大学の売店からもらってきて壁に貼ってあったのだが、愛嬌のあるその力士の顔が、杏子の意識下で連想の引き金を引いたらしく、同じ大学の学生の顔をおもい出したのだ。

「鹿島君！」

杏子は、そう呟いた。文学部三年だが、一浪したということで、ひとつ年上だけれど、ハワイ生れの人気力士